

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800807		
法人名	社会福祉法人 蘇南会		
事業所名	グループホーム すみれ		
所在地	熊本県上益城郡山都町北中島2679-3		
自己評価作成日	令和3年5月10日	評価結果市町村受理日	令和3年6月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年5月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者一人一人のペースに合わせ、各自、自由に過ごしてもらっている。家族の訪問も多く、入居者、家族、職員との情報共有ができています。
 周囲の自然環境に恵まれ、日々、四季折々の風景を眺めながら生活している。また、収穫した野菜や散歩時に採取した野草を料理に使い、季節を肌で感じることができる。
 職員全員が介護福祉士を取得し、専門性の高いケアに努めている。看護師も週2回勤務しているため、医療面でのサポートもできている。
 法人自体が古く、規模が大きいので、地域での知名度、住民の関心、貢献性が高い。また、関連医療法人があり、介護・医療を連携して行い入居者の健康管理に繋がっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

広大な敷地に一般家屋のように立つホームは、コロナ感染症の影響により車を使って敷地外へ出る機会は控えているが、季節を感じながらの散歩や散策、日光浴など身近な外出は変わらず支援されている。散歩中に摘んだ草花はリビングなどに飾ったり、野草・山菜も料理に活かされている。一人でゆっくりと過ごしたい方への声掛けや空間作り、エプロンを付けて盛り付けを職員にアドバイスする光景や、女性入居者は起床後、お化粧やを済ませて食堂に集まれるなど、一人ひとりのこれまでや思いをくみ取った生活が継続して支援されている。また、専門性を活かしながら職員が生き生きと業務に当たる姿は、家族の大きな信頼にも繋がっている。感染症の拡大により運営推進会議などを通じた認知症の啓発活動や、小・中学生、高校、専門学校生の体験や実習など法人の力を生かす機会が減少していることは残念に思われる。体験学習が入職に繋がった事例も考えると、終息後の取組の一つに掲げて頂くことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事務所の良く見える位置に理念を掲げ、職員会議では、折に触れ確認を行っている。	入居者一人ひとりの歴史を尊びながら、家庭生活の延長として長年培ってきた台所仕事や、縫物、製作などの手仕事、畑作業に皆で関わり、自然に恵まれた一軒家での暮らしを展開している。職員は入居者のより良い生活のために様々な提案を出し合い、ケアの質の向上に努力しており、その先に理念があると管理者は語っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	立地の面の問題で地域に出向く機会は限られているが、地域の催しへの参加や馴染みの地域への外出を通して交流できるように努めている。(R2年度はコロナ感染のため実施できていない)	昨年より地域や法人行事が中止となっているが、町の一大行事である八朔祭りには、当日の人混みを避け、出し物見学に後日出かけ、車窓から見学するなど出来る事で地域へ出る機会をもっている。防災無線から流れる地域情報は入居者の楽しみであり、地名や知人の名前が出ることでその後の会話にも繋がってる。法人が運営する各施設が福祉村として一つの地域を作っており、コロナ禍においても来訪者や関係者の往来に声を掛け合い、人々と繋がりながら生活している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等を通し、認知症の講習等を行っている。(R2年度はコロナ感染のため実施できていない)		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、幅広い委員の方の参加があり、日々の報告を行っている。また、客観的な意見や要望をもらえることで質の向上に活かすことができている。(R2年度はコロナ感染のため書面で確認してもらっている)	コロナ禍以前には行政や社協をはじめ、地域の代表者や駐在所、家族の代表などが多数参加している。スライドから入居者の近況を報告し、身体拘束委員会を設置して、ホームの状況を説明しながら、参加者からの意見や質問に応じている。また、会議の中で認知症や感染症、熱中症などについて勉強会の機会を設けている。現在会議は資料送付による書面審議としており、年度当初にはホームの事業方針や計画についても報告し、透明性のある運営に努めている。	通常開催では参加者から様々な要望や意見を受けて、地元駐在所より、法人に行方不明者が出た場合を想定した講義なども行われている。地域からのバックアップが安心するところとなっており、今後も会議がホーム運営に反映されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村とは、電話やメールにて密に連絡を取っている。法人内の職員も町村役場に訪問することが多く、事業所単位ではなく、関係事業所をまたいで連絡や報告もスムーズに行っている。	通常開催であれば運営推進会議には毎回、行政からの参加があり、リビングを会場として入居者を紹介するなど、実際の生活ぶりを見てもらいながら、進行している。職員は書類提出や相談、質問ごとで役所を訪れては担当職員などと気軽に言葉を交わしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を運営推進委員会で行ない、外部の意見を聞いている。また、年に1回は、勉強会を行い、正しい知識の習得を行っている。玄関の施錠については、一時的に行うことがあるが、家族への報告を随時行っている。	ホーム内研修ではその時々に入居者の状況などからテーマを絞り、入居間もない方の帰宅願望への対応に意見を出し合い、月日を重ね落ち着かれていく様子には、入居者同士の関わりから学ぶことが多いとしている。センサーマットを使用する方にはプランに入れ、家族の了承を得るとともに運営推進会議でも報告している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての研修会を行っている。また、毎月の職員会議を通して、介護の考え方や、ストレスへの対処法などお互いに話せる機会を作っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する研修はおこなっていないが、個人情報保護に関して研修会を行った。該当する入居者がいる場合は、支援をおこなっていく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明をしているが、電話で問い合わせに随時対応している。入居料がの支払いが難しい家族とは面談し、相談先等の紹介も行っている。 報酬改定時は、家族会で説明を行っていたが、コロナ感染流行のため今回は説明文書を送付した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年度初めに家族向けにアンケートを実施し、家族の意見を聞き運営に反映している。また、苦情相談受付箱を職員から見えない玄関に設置している。新型コロナ流行前は、家族と運営推進委員が話をする場を設けていた。	感染症の社会的状況を見ながら、その都度面会の制限や窓越し面会に切り替えながら、家族の来所の機会を作っている。毎年家族アンケート(満足度調査)を実施しており、ホームの取組に対して好意的な評価を受けている。入居者の普段の様子は広報紙や電話で伝え、家族に安心してもらうよう配慮している。	せっかくのアンケートがより入居者支援に反映されるよう、今後質問内容を詳細にしたり、質問そのものを検討するなど、職員意見を収集することが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議時に職員の意見や提案を聞くようにしている。普段の会話からも、方向性について職員に相談したり、意向を確認するようにしている。	毎月職員会議を実施しており、外出が制限される中でホーム周辺でできる活動についてアイデアを出し合い、庭でのおやつ時間や手作り弁当の日を企画している。定年に伴う職員異動があったものの、離職の少ない職場環境が入居者との関係をより深いものとしており、全職員が有資格者(介護福祉士)であることも職員自身の努力の成果として評価される。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	法人での就業規則であるため、すみれ職員へ特化することはできないが、年休の取得や昇給等へ結びつく努力はしている。自主的であってもサービス残業はしない様、随時声掛けを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外の研修は、積極的に参加する様になっている。令和2年度は、コロナ感染のため、中止された研修も今年度は実施されれば参加できるよう進めていく。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	職員は地域ケア会議や上益城部会に参加している。管理者は、法人レベルでの交流を通じて、情報交換等を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居初期には、職員が心がけてコミュニケーションを取り、本人が早くなじめるよう援助をおこなっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所申込みの時点から、ご家族の意向について十分聞き取りを行うようにしている。特に入居者に対する思い、入居になったことに対するお気持ちを聞き取るように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居・家族の入居時の状態に応じて対応は異なるが、なるべく意向に沿えるように支援している。入居ししばらくは、家族への報告も密に行い、安心していただけるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除、洗濯、料理、入居者同士のお世話などしていただいたことに感謝の気持ちを伝えている。 教えられることも多く、お互いを頼りにする関係性はできている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染前は、居室でゆっくりとプライベートな時間を過ごせるようにしていた。遠方にお住まいの家族以外は、頻回に面会があり、入居者の安らぎにつながっている。状況報告を踏まえながらそのことをご家族にも伝えるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の老人会への参加やふるさと訪問(ドライブ)等を行い、なじみの地域の情報が得られるようにしている。令和2年度はコロナ感染のため実施困難であったが、花見には地域の桜の名所に車中であるが出かけた。	入居者同士、入居者と職員の関係性が馴染みとなっており、エプロン姿で料理を手際よく盛り付けたり、昼食後のひと時をトランプをして過ごされるなど、安定したホームでの暮らしぶりを窓越しより垣間見る事が出来た。女性入居者は殆んどが朝から化粧をしてリビングに来られ、外出が難しい今、散髪には職員や家族が対応している。春には敷地内でわらびやタラの芽、タケノコなどの山菜採りに入居者が力を発揮されているようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配置などを工夫し、孤立しがちな入居者が話をしやすい環境を作っている。活動も全員で参加できるように、離れて座っていても声掛けをしたり、意見を聞くようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	可能な範囲で、退去された入居者の面会を行っている。体調不良で入院された入居者の退院後の入所施設の相談や手続きの支援等も受け入れている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活の中での会話や活動中を通し、入居者の発する言葉や関心事、人となり把握し、介護計画に取り入れている。	入居者は自らの言葉で意向を伝えており、職員にも気を使われるなど、社会性もしっかりと持ち合わせておられるようである。職員は普段の様子から入居者の相性や食事のスピードの違い、テレビの位置などを考慮して、テーブル席を検討しており、入居者のスムーズな生活を支えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメント時や、コミュニケーションを取る時などなるべく生活に沿った話を持ち出し、生活背景の把握に努めている。家族に報告・連絡するときも、こちらからの説明と共にご家族からの情報も聞き取るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1ユニットの少数で、居室も独立しているため、安全な範囲で各自、自由に過ごしてもらっている。職業歴や趣味等を鑑み、入居者の得意な活動(料理や畑仕事、手芸等)を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の訪問や電話が多く、家族と接触する機会があるため、話し合いはしやすい。変更点や方向性を含め担当職員と意見を出し合いながら計画作成を行っている。	入居者・家族の意向を優先し、職員意見を反映しながらプランを立案している。入居者の中には入居から10年、介護度に変化がなく、今日まで元気に過ごされている方がおられるなど、職員のケア力や自然に囲まれた生活が入居者を支えていると言っても過言ではない。プランは半年ごとに見直し、新たなプランは家族へわかりやすい表現にて説明している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日3回、出勤職員へ申し送りの際、問題点や課題について話し合い連絡ノートに記載している。解決できない課題については、管理者に相談したり、職員会議の議題に挙げ介護計画へ反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が所要や遠方在住、コロナ感染の影響で訪問ができない場合は、職員が買い物や病院受診等の支援を行っている。また、理美容も感染の可能性があるので、現在は家族に了解を取り職員が散髪をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ感染前は、ボランティアや理美容室の来訪等があった。運営推進委員に駐在所の警察官にもなってもらっているため、安全面でのサポートもしてもらっている。現在は施設立ち入りの規制あり、歯科の訪問診療のみ実施している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居によってかかりつけ医を変える必要がないことを説明している。事業所外のかかりつけ医には、家族に代わって、職員が電話で最近の状況を知らせることもある。	かかりつけ医は変更することなく継続されてよいことを伝えているが、現在は全員、法人医療機関を希望され、月1回受診に出向いている。専門医については、家族の対応を基本としているが、コロナ感染症への対応から、職員による支援も行われている。入居者の健康状態や診察の内容など、家族と状況を共有し、相談などにも丁寧に応じている。口腔ケアについては、居室やリビングでの歯磨きが行われており、希望や必要に応じ訪問歯科診療が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師不在の時は、かかりつけ医や法人内の看護師に入居者の相談をしていた。現在は週2回、看護師が勤務しているため、医療面でのアドバイスを受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時から随時、予後について入院先と確認を行っている。 入居者の精神状態によっては、すみれで療養しながら、病院受診を繰り返すこともあり、臨機応変に対応を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	関連施設に特別養護老人ホームがあり、今までほとんどの家族は、重度化した時点で特養入所を希望されてきた。 今後は、重度化した場合や終末期のあり方についての意向を再度確認する必要がある。	複合施設という事もあり、家族は介護度が高くなった場合などは隣接する特養での対応を考えておられるようである。現在はホームの特徴を生かしながら、職員のチームワークで個別支援の充実に努めている。今後は重度化や終末期支援のあり方について、家族の意向を再度確認していくことが必要としている。	リビングの窓越しから見え、聞こえる入居者の様子から、ホームの穏やかな日常が窺える。今後も入居者や家族の思いに応える支援の継続に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的にはではないが、AEDの使用方法について業者による研修を行い、救急時の応急処置セットを玄関に設置している。 法人内でも、緊急時の応援体制について統一して確認を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	食料、水分の備蓄はできている。(法人でも準備有) 災害時の避難訓練を定期的に行っている。 地域からは離れているため、隣の施設と協力して連携するようにしている。	火災に関する訓練を年2回実施している。災害備蓄についてはリストをもとに確保しているが、自然災害の訓練には至っていない。特養や老健をはじめ、複合施設の中にあるホームは、日頃から他の施設と有事に備えて連携を図っている。	火災は火を出さない事が重要であり、今後も居室内ベッドのコンセントなど日々の安全チェックの徹底を期待したい。また自然災害に関する訓練や、感染症終息後は、運営推進会議や家族の参加協力による災害訓練の実施に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年に1回は、人権についての研修を行っている。入居者の性格や生活歴を考慮し、本人の気持ちを尊重した言葉かけをするように心がけている。	人権に関する研修会の開催や、一人ひとりの生活歴などを考慮した声掛けなどを職員間で共有し、日々の支援にあたっている。呼称は基本的に苗字にさん付けとしているが、反応などから下の名前でも対応している。身だしなみの支援で、理美容は現在、感染症の面からホーム内で支援している。女性の入居者が多いホームであるが、好みの衣類への要望や、朝食時にはお化粧を済ませて集われている。化粧品は不足する事のないよう、家族の協力も得ながら準備されている。	朝早く起床し着替えや化粧を済ませて自分だけのコーヒーの時間を楽しまれる方もおられるようである。また、一人で家族からのハガキや新聞に目を通しことを日課とされている方もおられる。変わらぬ支援が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	1対1で関わることも多いため、リラックスした雰囲気でお話するように心がけている。また、小さな要望も随時聞くようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人のペースに合わせて、食事時間や入浴の有無、一日の過ごし方を決めている。 外出行事も本人の意向で居残りをしたり、人員が足りない時は他施設職員の臨時的な支援で対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ほとんどの女性入居者は化粧を自分でしており、衣服も自分で選んでいる。(職員一部介助) 散髪も入居者のリクエストに沿えるように意向を聞きながら行っている。(現在はコロナ感染のため職員が行っているが、本来はなじみの理美容室へ行ってもらっていた)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理店をしていた入居者には、毎食野菜のカットや味付け、盛り付けを担当してもらっている。それ以外の方でも、他入居者にランチョンマットや箸、湯のみのセッティング、お茶注ぎなどできることは分担して行っている。	食事は法人厨房による献立や食材準備を受けているが、ホームでも入居者の希望を聞きながら献立を作り、職員による食材購入も行われている。入居者は食材切りやつぎ分け、配膳など出来る事に力を発揮されている。訪問当日もエプロンを付け、手際よくつぎ分けや盛り付けなどを行う方、配膳がまだのテーブルを教えられる方など、食事を待つまでの時間も家庭の雰囲気を感じる事が出来た。また、おやつ作りやお弁当箱に詰めて庭先でのランチなど、職員の工夫が活かされている。	感染症が落ち着けば数人でのランチなども検討したいとしており、実現が期待される。職員1名が同じ食事を摂っており、今後は代表者として味や量、彩りなどに加え、入居者の発せられた一言など、今後に活かせるコメント(検食簿のような形で)の記録も検討いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、嗜好品について主治医、家族の意見を聞きながら支援している。また、毎月の体重測定で体重の増減を確認している。週に4回は管理栄養士による献立にしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを見守りや誘導をしながら行っている。 必要時は歯科医師に往診してもらい口腔ケアのアドバイスをもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	なるべく必要以上の介助は行わないように、声掛け、見守り、介助方法を職員で統一して行っている。 必要に応じ、タイミングをチェックし誘い排尿等につなげている。	個々に応じて、最小限の見守りや介助に努めており、現在は殆んどの方が布パンツにパットで過ごされている。居室にトイレが配置されており、夜間はトイレの使用や安全面からポータブルトイレを置かれている方も1名おられる。職員が介助方法を共有し、自立の継続に努めていることは、尊厳や家族の負担軽減にも繋がっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日中散歩や体操、水分補給などを定期的に行い、排便の促進につなげている。便秘が続く場合は、Dr.に相談し排便コントロールの調整を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週に2回以上の入浴日を設けているが、固定はせず、本人の意向や体調に合わせて声掛けを行っている。一人で入浴が可能な入居者には、脱衣室に職員が待機し安否確認のみで施行している。	入浴は週2～3回、午後を中心に支援しているが、希望や状況に応じて午前も行っている。見守りや必要な介助などプライバシーに配慮しながら、ゆっくり入ってもらえるようにしている。浴室や脱衣所は清潔や整頓を心掛け、気持ちよく使用できるようにしている。	今後、季節湯(柚子や菖蒲など)、散歩中に摘んだヨモギ等を使った薬草風呂など、普段の入浴と違った取組も楽しみに繋がると思われる。取組に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠パターンに応じ、起床・就寝時間は統一せず、各入居者に合わせている。昼寝が習慣化している入居者や臥床希望の入居者には日中横になってもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとり使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	病院に電話や受診時直接状態を報告している。受診後は服薬の説明書をカルテに挟み、変更時は内容や理由について連絡ノートに記載している。服薬に関しては職員2名で確認し、拒否のある入居者にはつづいて服薬してもらうなど工夫をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	手芸、菜園、料理、新聞読み等各々の利用者の趣味活動を支援している。嗜好品については、家族の情報を元に医師に確認し提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染前は、毎月1回ふるさと訪問として外出行事を行っていたが、現在は中止中である。外出も、家族の協力があれば随時行っていた。今は遠出はできないが、敷地内の庭が広く山々に囲まれているため、景色や季節を感じながら散歩や日向ぼっこを行っている。	現在は外出を控えているが、敷地内は広く、居ながらにして季節の変化を感じる事ができ、散歩や散策、日光浴は日常的に支援している。また、桜見や八朔祭りは馴染みの物であり、後日街中に飾られた造り物見学に出かけている。感染症の発生以前は、ふるさと訪問や外食をはじめ、家族の協力も得た外出支援が行われており、再開を双方が心待ちしている。	感染症の影響を受けにくい敷地内の散歩は、入居者にとって何よりの支援と思われる。隣接して運営されていた保育所が閉園され、乳幼児との交流が出来ない事は残念であり、今後はホーム外の園児や小中学生との交流に繋がる外出などにも期待したい。また、これまでの旅行先や行ってみたい場所などを聞きとり、ビデオやDVDを楽しんだり、旅の雑誌を配置するなど外出気分を味わえる取組みも良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者全員が個人の財布を持っている。普段は、本人・家族に了解を取り、金庫に保管している。外出が可能な時期は、自分の財布から職員の介助の元、買い物をしてもらっていた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族等からの電話は入居者に取り次いでいる。聞き取りにくい場合は職員が支援をしている。携帯電話を使用中の入居者には、着信の確認や操作方法などの支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用部分は、「家」を感じられるように、間接照明を用いたり、木目調の家具を置いている。廊下も腰壁にし、無機質にならないようにしている。また、季節の草花や写真、製作物を飾り、季節を感じられるように工夫している。	広大な敷地に一軒家の雰囲気のあるホームは、リビングをはじめ共用空間で、我が家を感じてもらえるような環境に努めている。玄関先には法人医師から届けられた季節の花苗などが植えられたプランターが置かれ、ホーム内も散歩中に摘んだ草花などが飾られている。また、日常を写した写真の掲示や、入居者の手芸作品等も置かれており、感染症で外部の入室を控える以前は、家族など来訪者の楽しみや入居者の励みになっており、感染症の終息が待たれる。	昼食後のリビングでは、大きめのランプを数人で楽しむ光景が見られた。入居者の賑やかな声やカードを手渡す姿から、居心地の良い日常生活が窺え、変わらぬ支援の継続に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1階玄関や2階の廊下にベンチを置き、遠目で見守りをしながら独りで過ごせる場所を作っている。また、安全な範囲で、居室で過ごしてもらう場合もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なじみの家具を持ち込み、安心して過ごせるようにしている。また、壁に入居者が作成した作品や家族写真、お孫さんの絵などを飾り、独りで居室にいても安らぎを感じられるように工夫している。	1階と2階にある居室は採光に多少の差はあるものの、トイレや洗面台が設置され、広さも十分な空間である。入居時に一覧表をもとに準備品などの説明を行っており、日用品の他、テレビや冷蔵庫の持ち込みも行われている。居室内の物品の確認は現在、担当者を中心に行い、不足の品などを家族へ伝えていく。また、連絡ノートを活用し、全職員で携わることで、広い目線で気づけるようにしている。	コロナ感染症の影響により家族の来訪を控えており、衣類の不足や整理、居室内の環境など家族が気になる点であると思われる。今後も電話や窓越し面会時などに、居室の様子を細やかに報告することで安心に繋げていきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室にトイレと洗面所を設けており、一部車いすでも使用できる作りになっている。電気のスイッチやコンセントの高さもしゃがむことなく使用できる高さになっている。手すりや階段の段差は、高齢者にも視覚的にわかりやすいように色を工夫している。		